

# 教職教育としての和漢比較文学

—— 高校学習指導要領における古典の指導内容と関連づけて ——

## Wakan Comparative Literary as Teacher Education

With Reference to Teaching Contents for Classics  
by Course of Study for Senior High Schools

中村 健史

Takeshi NAKAMURA

(要旨)

現行の『高等学校学習指導要領』は古典の指導事項として「我が国の文化と中国の文化との関係について理解すること」をかかげるが、実際の教職教育においてこれと対応する授業がひろく行われているとは言いがたい。そこで稿者は担当する「文学・文芸特別講義」において、蘇軾「赤壁賦」と、それをもとに詠まれた三条西実隆の和歌「知るやいかに水と月とはゆくゆくも尽きせぬものをあはれ世の中」(『再昌草』)を取りあげ、和漢比較文学の観点から論じることにした。「赤壁賦」が無常を乗り越えようとする積極的な意志を主題とするのに対し、実隆の歌は人の世のはかなさを慨嘆する。作者の個性や資質のみならず、文化の差が詩歌に大きく影響することを指摘し、受講者が「我が国の文化の特質を考え」「広い視野で我が国の文化について」とらえる機会を提供した。

(Abstract)

Under the present “Course of Study for Senior High Schools”, it is suggested that “Understanding the relationship between our culture and Chinese culture” as Classics Teaching Contents, but it’s difficult to assert such classes widely conducted as teacher education now. Then the author decided to focus on Chinese prose poetry “*Chi bi fu*” (*Sū shì*) and the Japanese poem, it means waka, which was composed on the basis of it, “知るやいかに水と月とはゆくゆくも尽きせぬものをあはれ世の中 (*Sanjonishi Sanetaka*) and these poems were actually conducted in his class, from the comparative literary point of view. The theme of “*Chi bi fu*” is the positive will to overcome the evanescence, but, the poem composed by *Sanjonishi Sametaka* bewails the transitory life. The author points out the cultural difference as well as poet’s personality and talent affects the poetry directly, and provide the opportunity to think over “Japanese cultural characteristic” (“Explanation for Course of Study for Senior High Schools Japanese”) for students.

キーワード：和漢比較文学、教職教育、赤壁賦、三条西実隆、悲哀の止揚、和歌の詩学

Key Words : Wakan Comparative Literary, Teacher Education, *Chi bi fu*,  
*Sanjonishi Sanetaka*, Sublation of Sorrows, Poetics in Waka

—

現在の『高等学校学習指導要領』<sup>1)</sup>では「古典A」「古典B」の指導内容として、

ウ 古典などを読んで、言語文化の特質や我が国の文化と中国の文化との関係について理解すること。

(「古典A」)

オ 古典を読んで、我が国の文化の特質や我が国の文化と中国の文化との関係について理解を深めること。

(「古典B」)

といった事項が掲げられている。和漢の古典をあわせ読むことで、文化の違いや共通点、影響関係を考えさせようという趣旨である。

当然、大学における教職教育でも、こうした手法が積極的に取りいれられるべきことは言うまでもない。しかし、その実践例はいまだ乏しいようである。いったい教科内容にかかわる科目は、国文学、漢文学それぞれの研究者が担当するため、おのずから説くところは専門とする分野にかたよりがちで、両者を横断し、比較するという発想が生まれにくい。

そこでひとつの試みとして、稿者の担当する「文学・文芸特別講義」のなかで以下のような講義を行った(2016年11月14日)。

二

題材としたのは、室町後期の歌人として知られる三条西実隆の

廿日、愚亭和漢会。「東坡が「前赤壁賦」を読む」といふことを  
知るやいかに水と月とはゆくゆくも尽きせぬものをあはれ世の中

(『再昌草』卷三十五、天文四年条)

という和歌である。

はじめに、作者の略伝を紹介し、字句の注釈をおこなった。

詞書にある「愚亭」は実隆邸を指す。「和漢会」は、この場合、何人かで和歌と漢詩をつくる会であろう。「東坡」は蘇軾のこと。「前赤壁賦(赤壁賦)」はその代表作で、当時ひろく読まれた『古文真宝』後集巻一に収められる。

初句に見える「いかに」は、疑問「知るや」を強めるはたらき(「知っているのか、知らないのか、どうなのだ」)を担う。実隆には「知るやいかに人の立つ名を思ふにも我が身の外につつむ涙を」(『雪玉集』6940「忍涙恋」)、あなたがほかの人と結ばれたという噂を聞くにつけ、涙がこぼれそうになるのですが、それを隠そうとしているわたしの片恋をご存じでしょうか、という歌もある。また結句「あはれ世の中」は、『新古今集』に収められた蟬丸の「秋風になびく浅茅の末ごとに置く白露のあはれ世の中」(雑下1850)によって有名な言いまわしで、「ああ、はかないこの世の中よ」<sup>2)</sup>の意。

さて、実隆の歌は「東坡が「前赤壁賦」を読む」、つまり「赤壁賦」の読後感、という題で詠まれたものであった。なかんずく「水と月とはゆくゆくも尽きせぬ」は蘇軾の文章を踏まえた表現であり、これだけで内容を理解することはむずかしい。そこでさらに「赤壁賦」を読んでみる必要がある。

蘇軾は四十四歳のとき、国政誹謗の罪によって黄州に左遷され、五年にわたって苦難の生活を送った。このとき、『三国志』の古戦場として名高い赤壁に遊んでつくったのが「赤壁賦」である。ときに元豊五年七月十六日（1082年）、明月の夜のことであった。

賦は「蘇子」と「客」の対話によって構成される。まず、客がいう。

月明らかに星稀に、烏鵲南に飛ぶ。此れ曹孟徳の詩に非ずや。西のかた夏口を望み、東のかた武昌を望む。山川相繆うて、鬱乎として蒼々たり。此れ孟徳の周郎に困しめらるる者に非ずや。方に其の荊州を破り、江陵を下り、流れに順ひて東するなり。舳艫千里、旌旗空を蔽ふ。酒を釀みて江に臨み、槩を横たへて詩を賦す。固に一世の雄なり。而るに今安くにか在らんや。況んや吾と子と、江渚の上に漁樵して、魚蝦を侶とし麋鹿を友とす。一葉の軽舟に駕し、匏樽を挙げて以て相属す。蜉蝣を天地に寄せ、渺として滄海の一粟のごとし。吾が生の須臾なるを哀しみ、長江の窮り無きを羨む。飛仙を挟みて以て遨游し、明月を抱きて長へに終へんは、驟かに得べからざるを知る。<sup>3)</sup>

一世の英雄曹操も、彼を翻弄した名将周瑜も、もはやこの地上にはいない。どれほど権勢を誇り、偉大な人物であったとしても、死はまぬがれないのである。まして私とあなたは官職もなく、魚やえび、鹿とともに生きるような身の上。あたかも天地のあいだにただようかげろう、海にうかぶ粟粒のごとき存在ではないか。この長江が永遠であることをうらやみ、わが人生の短いことが悲しまれてならぬ。仙人となれば長生を得ようが、それも今すぐにはむずかしいことだ。

客が語るのは、人みないつかは滅びゆくという無常の悲哀である。これに対して、蘇子、すなわち作者自身が以下のように答える。

客も亦た夫の水と月とを知るか。逝く者は斯くのごときも、未だ嘗て往かざるなり。盈虚する者は彼のごとくなるも、卒に消長すること莫きなり。蓋し将た其の変ずる者よりして之を觀れば、則ち天地も曾て以て一瞬なる能はず。其の変ぜざる者よりして之を觀れば、則ち物と我と皆尽くること無きなり。而るに又何をか羨まんや。（下略）<sup>4)</sup>

客よ、あなたはあの水と月とを知っているか。長江の水は流れゆくが、いまだ流れさってなくなったことはない。月は満ち欠けするが、盛衰するわけではない。変化するという立場から見れば、天地すら刻々と移りかわってゆくし、変化しないという立場から見れば、私も、また世界の一切も、消滅することはないのだ。それなのに、このうえ何を求めると

いうのかね。

川は流れてやまず、ひとたび去った水がもどってくることはない。そこだけに目をやれば、世界は無常である。しかし「逝く者」のあとにはかならず来たる者がある。水は過ぎゆくとも、川そのものは永遠に尽きない。人の世もまた同様である。一人ひとりに与えられた時間は有限であるが、社会はより若い世代に引きつがれてゆく。

こうした発想は、蘇軾特有のものではない。『論語』子罕篇に「逝く者は斯くの如きか、昼夜を舍かず<sup>5)</sup>」という有名な言葉がある。これをたとえば六朝の注釈家は「歳月がまたたく間に過ぎさってもどらず、かつての私は今の私ではないと嘆いたもの<sup>6)</sup>」(皇侃『論語義疏])と解釈したが、「赤壁賦」に後れること百年あまり、朱熹『論語集注』は

天地の化、往く者は過ぎ、来たる者は続き、一息の停まること無し。乃ち道体の本然なり。<sup>7)</sup>

「古きは去り、新しきは来たって、天地のうつろいは一瞬たりとも生成発展を止めることがない。それこそが世界を支配する「道」の本質なのである」と述べている。宋人にとって、世界の永続こそは信すべき「道体の本然」であって、もはやひたすらな無常観に従うことなどできなかつたのである。

実際に「赤壁賦」は、蘇子の言を聞いた客が「喜んで笑ひ、盞を洗ひて更に酌む。肴核既に尽きて、杯盤狼藉たり。相与に舟中に枕藉して、東方の既に白むを知らず<sup>8)</sup>」、二人とも気分よく酔って朝を迎えた、と記して一篇を終える。作者の意図するところは、明らかに「物と我と皆尽くること無きなり」という永遠の思想にあった<sup>9)</sup>。

冒頭に示した「知るやいかに水と月とはゆくゆくも尽きせぬものをあはれ世の中」もまた、蘇子の言によって一首を成したものである。すなわち先の引用中、最初の施線部「水と月とを知るか(知夫水與月乎)」は初二句「知るやいかに水と月とは」に、二つ目の施線部「尽くること無きなり(無盡也)」は第四句「尽きせぬものを」と対応する。

しかし、それでは第五句「あはれ世の中」についてはどうであろうか。これが「ああ、はかないこの世の中よ」の意であることはすでに触れた。だが「赤壁賦」において、世の無常に言及するのは客でなかったか。「吾が生の須臾なるを哀しみ、長江の窮り無きを羨む」といったその発言は「あはれ世の中」の嘆きに相通ずる。実隆は一首の大部分を蘇子の言葉に拠り、この世は空しくない、万物は将来にわたって「尽きせぬ」とうたいながら、結句ではむしろ逆の考えかたを示すのである。

これは一種の矛盾というべきではないだろうか。しかし、まさか歌人が「赤壁賦」を読みあやまったとは思えない。「あはれ世の中」は意図的な表現である。あえて無常の思いをうたおうとする背景には、しかるべき事情があった。

たとえば『古今集』仮名序は、歌に詠むべき題材を列挙して次のように述べる。

春の朝に花の散るを見、秋の夕暮れに木の葉の落つるを聞き、あるは年ごとに鏡の影に見ゆる雪と波とを嘆き、草の露、水の泡を見て我が身を驚き、あるは昨日は栄え奢

りて時を失ひ世にわび、親しかりしも疎くなり、あるは松山の波を掛け、野中の水を汲み、秋萩の下葉を眺め、暁の鳴の羽搔きを数へ、あるは呉竹の憂き節を人に言ひ、吉野川を引きて世の中を恨みきつるに、今は富士の山も煙立たずなり、長柄の橋も尽くるなりと聞く人は、歌にのみぞ心を慰めける。

春の落花、秋の落葉、老いゆく身の嘆き、はかない人の命、没落や逼塞、親しい友の心うとくなりゆくさま。そういったものこそ敷島の道にふさわしい、と仮名序はいう。和歌は本来、うつろいゆく世の無常をうたうための詩である。「物と我と皆尽くること無きなり」といった永遠の思想は、歌人のあずかり知らぬものであった。

もとより実隆は和漢兼学の才人である。「赤壁賦」に込められた東坡の人生観については、十分に承知していたであろう。しかし、それでもなお美意識の伝統にそむくことはゆるされないのだった。——すくなくとも、和歌を詠もうとするかぎり。

ここにあるのは、ひとり蘇軾と実隆の差ではない。宋代の文学と、和歌の伝統がそれぞれに持つ人生観、社会観、自然観の差である。永遠を信じようとする文化と、はかなさに美を見出そうとする文化と。わが古典文学はしばしば中国の色濃い影響下にある。しかしそのかたちはかならずしも一様ではない。なかには単純な受容にとどまらず、意識的な、あるいは無意識的な変容によって作品を生み出す場合もあった。実隆歌はその好例である。そして、このような「変容」のさまを探ることで、われわれはわれわれ自身を、あるいは中国の文化を、よりよく知ることができるのである。

授業の内容は以上である。終了後、感想カードを書いてもらったが、そのなかには、

- ・人の一生をはかないものだというのは日本人はよく考えることだが、それが他の国でも同じだということではないのは意外に思った。確かに日本人の感覚では桜や蛍など短い生命のものをめでるといふことが多いし、それを題材にして歌をよく作っていたと思った。この独特の美意識は後世にも残していきたいことだと思った。
- ・蘇子の言う、「水は流れてもなくなることはない、月はみちかけしてもなくなるらない、人間ははかないものではない」という考えは納得できたが、私は「人間ははかない、さびしい」と言っている三条西実隆の方の考えが好きだ。結局は、人間は一人であるし、すごくちっぽけであると思う。だからこそ、家族や友達を作って限られた時間を幸せに生きようとする。
- ・率直に思ったのは日本は嘆き（＝個人の感情）を詠んだ物が多く、中国は希望（＝教訓に近いもの）を詠んだ物が多いということです。そう考えると、日本のものは楽しむ、味わいというイメージで、中国のものは学ぶというイメージが強いなと思いました。<sup>10)</sup>

自分の考えが蘇軾と実隆、どちらに近い比較、検討したもの、身近な例を挙げて美意識や人生観の差を説明しているもの、講義内では紹介しきれなかった差異や特徴について指摘しているものなどがあった。当初の目的は、おおむね達せられたとあってよいのではな

いだろうか。

注

- 1) 以下は、第2章第1節第2款所収「第5 古典A」および「第6 古典B」の「2 内容」(1)よりの引用。
- 2) 久保田淳『新古今和歌集』(角川ソフィア文庫、2008年)。
- 3) 月明星稀、烏鵲南飛。此非曹孟德之詩乎。西望夏口、東望武昌、山川相繆、鬱乎蒼蒼。此非孟德之困於周郎者乎。方其破荊州、下江陵、順流而東也。舳艫千里、旌旗蔽空。釃酒臨江、橫槊賦詩。固一世之雄也。而今安在哉。況吾與子、漁樵於江渚之上、侶魚鰕而友麋鹿。駕一葉之輕舟、舉匏樽以相屬。寄蜉蝣於天地、渺滄海之一粟。吾生之須臾、羨長江之無窮。挾飛仙以遨遊、抱明月而長終、知不可乎驟得。
- 4) 客亦知夫水與月乎。逝者如斯、而未嘗往也。盈虛者如彼、而卒莫消長也。蓋將自其變者而觀之、則天地曾不能以一瞬。自其不變者而觀之、則物與我皆無盡也。而又何羨乎。
- 5) 逝者如斯夫。不舍晝夜。なおこれは「赤壁賦」の「逝く者は斯くのごときも」の典拠でもある。
- 6) 孔子在川水之上、見川流迅邁、未嘗停止。故歎人年往去亦復如此、向我非今我。故云逝者如斯夫者也。
- 7) 天地之化、往者過、來者續、無一息之停。乃道體之本然也。
- 8) 喜而笑、洗盞更酌。肴核既盡、杯盤狼藉。相與枕藉乎舟中、不知東方之既白。
- 9) むろん作者としての蘇軾は、客の説を一方的に批判したり、拒否するものではない。むしろあのような無常観を心のどこかで感じ、人の世に絶望しそうになったからこそ、それを文章にあらわしたのである。「客」は動揺する蘇軾自身であり、作中の対話には彼の内的葛藤が投影されていよう。
- 10) ただし、後二者のように、「赤壁賦」と実隆歌の差をそのまま中国と日本全体に拡大して理解するのは、時代による変遷を考慮しないための誤りである。たとえば、本文中でも指摘したとおり、六朝時代には、中国の人々も流れる水を無常の象徴と考えていた。くわしくは吉川幸次郎『読書の学』(筑摩書房、1975年)を参照のこと。

[附記] 題目と要旨の英訳は小野崎可藍氏による。